
鬼の背中を刺す刃

クロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼の背中を刺す刃

【Nコード】

N2279S

【作者名】

クロ

【あらすじ】

鬼は嘘を嫌い、人は嘘を吐く、
彼は嘔吐きで、彼女は鬼だった…
これはそんな物語です。

prologue (前書き)

原作知識が乏しい為、ところがあるかもしれませんが。

パラレルワールドか何かと割り切って読んで下さい。

prologue

学園都市に在る窓の無いビルの中：

大能力者の空間移動テレポートでもなければ出入りすることすら叶わず、普段は主が唯一人存在するだけの空間に今一人の侵入者インベーターが訪れた。

「ごきげんようアレイスター、要件は理解しているのでしょう？」

無垢な少女にも、妖艶な女性にも見える彼女は【八雲 紫】。本来妖怪の賢者である彼女は幻想オカルトの存在であり、対極に位置する科学を代表する学園都市はあまりに場違いであった。

「ようこそ” 八雲 紫” 理解はしている、だが納得するかは別の問題だ：」

男にも女にも、大人にも子供にも、更には聖人にも囚人にも見える『人間』、【アレイスター】は赤い液体に満たされた円筒の中より、逆さに浮きながらも彼女を見下ろしていた。

「残念でしたわね、アレイスター。」

これは” 申告”ではなく” 宣告”なの、アナタが納得しようとしなからうと関係ないのよ？」

傍若無人に彼女は唯告げる。まるで答えは決まりきつていと言わないばかりに：

「君は自分達の力を過信しすぎてはいないか？

私がそれを許すとても？」

「それはアナタでなくてアレイスター？

いくら私達が幻想に生きる存在であろうとも、アナタごときでは幻想郷に介入することすら不可能よ？」

真実、アレイスターは幻想郷に介入する手段を所持してはいなかった。

しかし、八雲 紫にとってもアレイスターを敵に廻すということ
は危険なことには変わりない、アレイスターはそれを理解している
が故に彼女の主張を理解できなかった。

「アナタ何か勘違いしていないかしら？」

まあいいですわ、なんにせよ”彼”は借りていくわ。
安心して？手荒に扱うつもりは無いから。

”彼”が壊れて困るのは私も同じですし。」

アレイスターは更に彼女の思考が理解出来なくなった。

しかし、今”彼”を連れていかれることに問題があるのには変わ
りなく、依然として態度を変えることも無かった。

「駄目だ、今”幻想殺し”を連れて行く事は認められない。

例え君が相手でもだ。」

「やはりアナタは勘違いしているのね。まあいいわその方が面白い
しね…

何にせよこの事は確定事項なの、今更どうにもならないわ。

それにアナタの”プラン”とやらにもどうせ余裕があるのでしょう？

アナタのことだもの無いとは言わせないわよ？」

それだけ言い終わると、彼女は音もなく姿を消した。

「狸め…」アレイスターには、そう悪態をつく事しか出来なかった。

この日、無能力者の少年が学園都市から姿を消した…

鬼の背中を刺す刃（前書き）

時系列としては、テツラ以降ロシア以前を予定しています。

鬼の背中を刺す刃

―此処はとある森の中、其処に居るのはお嬢さんでも熊でも無く、二人の無能力者（レベル0）であった。

「いやー、参ったにやー。まさかこの年に成ってまで迷子になるとは思わなかったぜよ。」

「いや待て土御門、確かに俺達は迷っているが、森で迷えばそれは迷子じゃない、もう遭難者だ…」

しかし彼らは、つい数分前まで自分達の通う学校の食堂に居たはずであり、この様な秘境さながらの森に居るはずもないのである。

「しかし、何だってこんな事に…」

テレポーターってのはあり得ないしな…」

先程迄のふざけた口調はどこえやら、金髪グラサン、制服の下には派手なアロハと如何にも不良然とした少年―土御門元春―が一人呟く。

「じゃあ魔術なのか？」

この状況を作り出しているものの正体は？」

そう返すのはツンツン頭が目立つがそれ以外はごく平凡な男子高校生の様な少年―上条当麻―出会った。

「オイオイ、それこそあり得ないぜカミヤん。

”幻想殺し”がある以上カミヤんが魔術の対象になることはあり得ないし何より…オレが魔術の発動に気づかない訳がない。」

”幻想殺し”それは異能の力なら神の奇跡だろうと打ち消すことの

出来る正体不明の異能力、それは上条の右手に宿っている。
故に彼が魔術や超能力に巻き込まれ、こんな場所に現れるという事はあり得ない。

「それもそうか、だったら何で？」

いや、でも何というか”不幸”だ…」

そう上条当麻は不幸である。

犬も歩けば棒に当たる、上条止まれど棒に当たるといった具合には不幸である。

だから今回もいつもの事といった感じで過ごしていた矢先…

―ガサガサッ

「あれ？こんな所に人間？」

側の茂みより少女が現れたのだった。

「お、ラッキーだぞカミヤん、近くに街がありそうだ。

とりあえずこの子に道を聞くとしよう。」

「そうだな土御門。

なあアンタ、良ければアンタが住んで居るところに案内してくれないか？」

―普段の土御門達なら気づいただろう、こんな鬱蒼とした森に少女が一人でいる不自然さ、更には上条当麻は”不幸”であるということ…

「ここよ」

「「は？」」

「だから私はここに住んでいるんだって。
それより貴方はたべても良い人間？」

そう金髪に赤いリボンの映える少女は応えた。

「オイオイ、またかよカミヤん、こんな幼女ともとれる女の子に出会って直ぐにフラグを立てるなんていい加減にして欲しいですたい。」

「待て待て土御門、今回ばかりは違うんじゃないか？

現に俺は声をかけたただけじゃねーか。」

「とうとう声をかけるだけで女の子を落とすようになったのかにやー？この鬼畜野郎は、

カミヤんが悪い子に育って土御門サンは悲しいぜよ。」

おどける上条達は気づくことが出来なかった、少女が歪な笑みを浮かべている事に。

「—なんだかわからないけど、たべても良いんだよね？

じゃ、いただきます！—」

途端、彼女を中心に”闇”が噴き出した。

「「！！」」

二人共突然の事に瞬時に思考を切り替え、後ろに距離を取る。

「能力者！？　こんな所に？」

「何でもいい！カミヤん！！！」

土御門の呼びかけに上条が右手（幻想殺し）を突き出す。

上条の右手が闇に触れる、瞬間—闇は水が弾かれるかのように霧散する。

「なに？その右手は？」

少女の顔色が変わる。

「テメーこそ何者だ!？」

明らかに学園都市でも無い場所で超能力者なんて聞いたこともねーぞ!」

「学園都市? 超能力者? なにそれ知らない、そんな右手も私は知らない、知らない知らない、だけど怖いその右手は怖い、怖い怖い怖い怖い、だから消えて、今すぐに!!」

少女の目が強く開かれる、それをきっかけにするかのように彼女から色とりどりの光弾が溢れだす。

「なんだこれは!?! 土御門ツ!!」

「これは術式ツ! しかしこれは人間に使える物じゃないぞ!?!」

「クソツ、避け切れねえ!」

隙間無く敷き詰められた弾幕が彼らに当たる刹那――

「――あらあら、彼まで呼ぶつもりは無かったのに本当に付いてきてしまったのね。此も嘘から出た真というのかしら?

まあいいわ、なんにせよ…

ダメよルーミア、彼らは私が幻想郷に招いたお客様なのだから…」

その声を最後に上条達の意識は途切れた…

鬼の背中を刺す刃（後書き）

一応、上条がスキマに入れた理由は考えてあります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2279s/>

鬼の背中を刺す刃

2011年10月6日19時50分発行